

山の学校ランチ

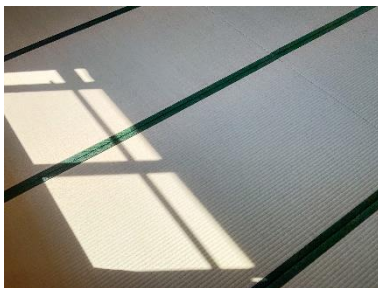
3月はお休みです。

4月下旬にリニューアル・オープンする予定です。

山の学校の畳が 新しくなりました

山の学校の「もみじ」、「やまざくら」、「きのこ」の3部屋の畳が新しくなりました。

い草の清々しい緑といい香りで、新鮮な気持ちになります。



haiku

梅どきは十五の別れ戻り来る

依田 美代子

山家川俳句会 今月の俳句

冴え返る水面の鳥ら固き陣

沖田 春海

楽行かわら版編集室からのお願い

楽行かわら版に掲載したい記事、お知らせがありましたら、ぜひご連絡ください。お知らせ以外にも、「我が家の庭にお花が咲いた」、「こんなに大きな野菜が取れた」などの日常の1コマのお写真でも大丈夫です。

ご連絡は山の学校事務室までお願いいたします。

原稿、写真を山の学校事務室までお持ち込みいただくことも可能です。

電話：0868-75-7126 メール：gs.fukuyama@gmail.com



万善かぶらの由来

むかし、むかし、万善に“おかね”というおばあさんが住んでいました。おばあさんは、夫に早く死に別れたので、毎日夜明けとともに家を出て働き、日暮れとともに帰ってきました。

ある年の春の夜、疲れて帰ったおばあさんは、すっかり眠りに落ちてから不思議な夢を見ました。

「畑のかぶらの花が真黄色に咲き揃った中で、ひときわずばぬけて大きな花を咲かせているのが見えました。その大きい花はやがて実をつけましたが、にわか雨で種が飛び、畑じゅうに散りました。

まもなく芽を出したかぶらはみるみるうちにすくすくと大きくなり、首のあたりには赤みを帯びて朝日に輝いていました。」

やがて田植え頃になり、かぶらの“たね”を取る時期になりました。おばあさんは、たね畑に行って夢に見たようなずばぬけて大きい一本のかぶらから“たね”を畑にまき丹精こめて世話をしました。

なんと、その年のかぶらは、首のところが赤みをおびて、根は細長く、肉質はかたくて、食べてみると葉も根も独特の風味があり、歯切れがよくて、今までのかぶらよりずっとおいしいものでした。おばあさんは、こんなおいしいかぶらを一人じめにするのはもったいないと思い、庄屋さんのところに相談に行きました。おばあさんの心根に感心した庄屋さんは、早速殿様に献上しました。

この話を聞いた殿様はたいそう喜ばれ、このかぶらを「おかねかぶら」と名付けて、おばあさんにたくさんのごほうびを与えました。

話を聞いて、村の人達がおばあさんのところに、“たね”を分けてもらいにくるようになりましたが、おばあさんは、誰にでも気持ちよく分けてやりました。

ところが不思議なことに、この“たね”を蒔いて作ったかぶらは、とてもおいしいのですが、また次の年の“たね”も、万善の畑で採った“たね”でないとおいしいかぶらができませんでした。そこで村の人達は、このかぶらを「まんぜんかぶら」と呼んで毎年おばあさんに“たね”をわけてもらって、おいしいかぶらを作って食べました。

やがて、おばあさんはつつましい一生を終えましたが、その“たね”は子孫に伝えられ、今では「万善かぶら」としてその名が日本全国へ広まったということです。

※香山昌男さん蔵書「作東の遺跡と民話」から抜粋